

ぶらうたなす

読書で磨く、豊かな学び

秋も深まり、読書にぴったりの季節がやってきました。近年、スマホの普及や忙しい毎日で、読書をする人が減っています。調査によると10代の1日平均読書時間は約15分という結果が出ています。しかし読書は知識の泉です。本を通じて新たな知識を得ることで、思考力が深まり、文章から著者の意図を理解する力も養われます。これにより学校生活での学びがより豊かになります。勉強や部活で忙しい日々でも、ぜひ図書館に来て本を読む時間を作ってみてください。読む力を磨いて学校生活をより充実させていきましょう。

(1-2 図書委員)

図書委員のおすすめの本 『貧困の克服』—アジア発展の鍵は 何か—

アマルティア・セン：著
集英社

今回紹介する本は、『貧困の克服』—アジア発展の鍵は何か—という本です。この本には、アジアで初めてノーベル経済学賞を受賞したセン博士が、日本やアジアの再生の鍵は、かつての経済至上主義でなく、人間中心の経済政策への転換であると力強く提唱され、国連も注目する「人間の安全保障」という概念の可能性とは何か？また、「剥奪状態」「潜在能力」「人間的発展」といったキーワードが示唆する、理想の経済政策とは？4つの講演論文がオリジナル編集されたセン理論の入門書であるとともに、いまだに貧困、暴力、深刻な人権侵害にあえぐ人類社会を見つめなおせるようになる本です。興味のある方、日本や世界の経済について知りたい方はぜひ図書室に足を運んでみてください。

(1-2 図書委員)

NO.7

神無月

(かんなづき)

長井高等学校

図書委員会

図書館

2025.10.30

『図書館長ではないけれど。』

押忍！ 今回は代打で一応司書教諭を仰せつかっているKが執筆を担当します。いつものキレキレのS先生の文章を期待されていた方、次号にご期待ください。

私が今回紹介するのは、重松清の「せんせい。」という書籍です。重松の作品には学校や家族がテーマになっているものが多く、例に漏れず本作品にも教師と生徒をめぐる六つの物語が収録されています。結構昭和臭がするものの、不思議と郷愁や懐かしさが感じられる話ばかりです。

どうしても好きになれなかった生徒、通称「にんじん」の話はチクリと胸に刺さります。主人公の工藤先生は、前の担任から引き継いだ小学六年生のクラスで三十人三十一脚の練習を行います。目標は去年の記録を超えること。そのために工藤はわざと「にんじん」を補欠にしてしまうのです。そのうえ、タイムは全然早くならなかつたのに、工藤は新記録更新！とクラスに嘘をつきます。当然のことながらその罪悪感はずっと工藤に付き纏います。…数十年後の同窓会で久々の再会を果たした「にんじん」と工藤。そこで工藤が「にんじん」から掛けられた言葉とは。

前の担任への嫉妬心からくる反発、周りからの助けが自分の頼りなさを論われているように感じてしまう偏屈さ。人としての正しさと教師としての正しさ。大人になって、この仕事をしていて、「共感」という感情を抱いていいものか悩むのですが、それでも「わかる」と感じてしまうのは、私がまだ未熟な教員である証のようにも感じます。重松の作品に出てくる教師はみんな人間臭く、教員と人間の狭間でできることとできないことのやりくりに四苦八苦する姿が、先生だって人間だということを思い出させてくれます。「僕は教師という職業が大好きで、」「同時に、教師とうまくやっていけない生徒のことも大好きで、」。どの作品にも重松の愛が詰まっています。教職を目指したいと考えている人、逆に先生のことがどうしても理解できないと感じている人、ぜひ手に取ってもらえたなら嬉しいです。